各地の取り組み　広島県広島市

広島豪雨災害を経験して

子育て・サークル応援グループMaMaぽっけ 代表　**坂本 牧子**

広島土砂災害に際しましては、全国の皆様からの温かい励ましのお言葉やご支援をいただきありがとうございます。たくさんの方々のご支援のおかげで、被災した地域の小学校や保育園は再開することもできましたが、あらたな課題を目の前に、仲間と共に、子育て世代が安心して暮らせ、子ども達の笑顔を大切にできるよう活動を継続しているところです。

安佐南区というところ

私の暮らす広島市安佐南区は、市内中心部より１時間圏内という生活しやすい場所に位置しています。広島市全人口比では安佐南区内に約20%、それに対し６歳以下は約25%（約２万人）の子どもが住んでいるという、多くの子育て世代が暮らすまちです。また、転勤族の家庭も多く、実家等の援助が受けにくい状況がみられます。
（広島市HP統計データ平成26年２月末「人口、年齢別人口（区役所別）」より）

そんな安佐南区は、昭和50年代より「地域ぐるみの子育て運動」と題して、区社会福祉協議会が中心となり、「預け預かり型子育てサークルの活動」を支援して下さっていたという経緯があります。講師等を招かず、子育て中の親子が中心となり運営する子育てサークルが、区内に35か所もあります。私たち「MaMaぽっけ」メンバーは、サークル活動を体験し、卒業した先輩お母さんたちのボランティアグループです。子育てサークルの存在が、転勤族の親子にとっては大切な友だちづくりの場であり、また、サークル活動をきっかけに、地域の様々な活動に積極的に参加する親を育てているといっても過言ではありません。

私たちはそんな地域の中で、はじめての子育てで、０歳児の子どもをもつ母親の友だちづくりの必要性について強く課題を感じていました。そんな中、「親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”（ＢＰ）」に出会い、平成23年から安佐南区内でも取り組みをはじめています。豪雨災害では、ＢＰプログラムに参加してくれた親子も被害に遭われています。また、子育てサークルに参加している多くの親子も、いろいろな被害や影響を受けることとなりました。その報告を私からさせていただこうと思います。

あの親子が避難所に！

８月20日の晩「激しい雨は、きっと一時的なもの…」と床につきました。真夜中になっても雨は全く弱まらず、雷の音と稲光の間隔が極端に短く外の様子を確認することもできませんでした。その恐怖は大きく、赤ちゃんがいる家庭では「どうか我が子が目を覚ましませんように…」と見守りながら朝になることを願った母親が多かったです。結局、私の暮らす安佐南区山本でも、幼い子ども達が災害の犠牲となりました。

翌日朝、近所では何か所も崩れている場所があり、本当に驚きました。赤ちゃんを連れたお母さんや妊婦さんが避難されていたらと思い、私は避難所となった地域の集会所へまず足を運びました。普段からお世話になっている地域の方々が避難所開設の準備をされ、行政からも２名の職員が派遣されていました。「坂本さん！いいところに来てくれた。若いお母さんと子どもさんが避難しとるんよぉ～。わしらじゃなぁ…話を聞いてやってくれんか？」ということでお部屋にお邪魔しました。

そこで出会ったのは、偶然にもＢＰに参加してくれたＡさんと子どもさん。彼女は、雨のひどくなった夜中に、地元の消防団の方の指示で、着の身着のまま、親子三人で避難所へ来られたそうです。彼女も転勤族なので、近くにすぐに頼れる方はいません。避難所で心細かったときに、ＢＰの仲間とラインでつながっていたことが、何より心強かったそうです。「誰かが連絡をしてくれていたので、すごく心が紛れた」と話してくれました。そのうちの一人Ｂさんは実家に帰省中で、川の近くにある我が家のことが心配で大変だったようです。そんな仲間に、被災をしたＡさんが「Ｂさん宅の辺りは被害がない」ことを伝え、「急いで戻らなくても大丈夫」とＢさんに伝えたそうです。私は思いました。県外の実家に帰省中だったＢさんの親御さんは、そんなことを伝えてくれる娘の友人が広島にいてくれたことをとても心強く思い、安堵されたのではないでしょうか・・・。

また、同じＢＰ仲間のＣさんもがけ崩れのおそれのあるところに住み、出張で夫が不在な中、０歳児の赤ちゃんと二人で不安な夜を過ごされたそうです。先に避難したＡさんに相談し、すぐに実家に戻る準備をしたそうです。避難所で一晩明かしたＡさんはその経験から、「自分は避難指示が出て自宅に戻ることができないので、もう少し我慢して家の様子を見てから実家に戻ろうと思っている。Ｃさんは今荷物の準備ができるのだから、実家に戻った方が、自分自身も子どもも安心じゃないか」と伝えてくれたそうです。「どうしていいかわからず、オドオドしていたときに、そんなふうに言ってくれたＡさんはお姉さんのよう！」と、Ｃさんは私に先日話してくれました。

困ったときに声が聞ける仲間がいるということ

避難所の役割

Ａさん自身は、プライベートなスペースが確保できるということで、ＢＰの会場でもあった公民館の避難所の方に移動され、２日後に土砂が直接自宅へ影響がなかったことを確認して四国の実家に戻られました。その公民館では、館長さんが地域の方と行政の担当者とのパイプ役をされていることを目の当たりにし、地域の避難所の役割の意味を学ぶことができました。

この度の土砂災害の被害が大きい地区にある公民館では、私は今年の２月にＢＰを実施させて頂きました。心配だったので、参加して下さった方に電話で連絡をとってみたところ、こちらもＢＰ仲間みんなですぐに連絡を取りあわれたそうで、みんなの安否はすぐに確認できていました。うれしかったです。電話で話したＤさんは、アパートの２階に住んでいて、日中夫は仕事に出かけてしまい、１階が床下浸水に近い状況で外に出られない動けない状況だったそうです。停電しているし、子どもは暑くてぐずるし、どうしようか･･･ という時に、近くに住むＢＰ仲間であるＥさんと電話で話したら同じような状況だったので、安心して自宅で我慢をしながら過ごすことができたと話をしてくれました。困った時にすぐに声が聞ける仲間がいること、本当に心強かったことと思います。

「災害ボランティアセンター」発足にむけて

私たち「MaMaぽっけ」は、安佐南区ボランティアセンター登録グループです。災害後そのつながりをとおしていろいろな情報が入ってきました。

マスコミの日々の情報で、少しでも早く役に立てればと、たくさんのボランティアについての問い合わせがありました。本当に有難いことですが、被災された地域は20日以降天候がなかなか回復せず、安全が確保できないため行方不明者の捜索が進まないのが現状でした。

そんな中で、私たち地域に密着したグループには「細やかな生活支援を！」という、大切な役割がありました。それは、今までの活動のお母さんネットワークでニーズを拾いながら動くことです。最初は、紙オムツやおしりふきの足りない避難所への支援、次は入浴サービス会場で不足しているお風呂用タオル、シャンプー、肌の弱い子どもさん用のボディーソープを現地にお届けしました。物資については、被害のあった地域が限定されていたこともあり、あっという間に多くの物資が運ばれました。しかし、必要とされる物資が必要とされる方に届けられていない現状もありました。高く積まれている紙オムツの山をある避難所で見ながら、ある避難所ではこんなこともありました。

近隣の友人同士で避難をされている複数のご家族。自宅は土砂が流れ込み、仮の住まいを探し、引っ越しの準備に追われていたそうです。３人目の赤ちゃんを、ご近所仲間で見合いっこしながら家の片づけをされていました。いろいろお金がかかりそうなので、赤ちゃんの紙オムツを避難所でもらおうと思ったら必要なサイズがなかったそうで、お母さんは遠慮されて「買うから大丈夫！」といわれました。こんな時に、そんな思いを察し声をあげ、動けるのも、同じ母親だからこその思いでした。紙オムツを無事に調達してきました。

被災された方の声をカタチに

これまで、私たち「MaMaぽっけ」は保健センター（子育て支援センター）、区内公民館、子育て支援NPO 、区内大学等と一緒に区内の子育て支援活動を行ってきました。災害後その連携はすぐに活かされ、いち早く子育て世帯のニーズの聞き取りを行った「NPO 法人 e子育てセンター」と安佐南保健センターと共に、「避難所内への臨時の託児所設置」「避難所や小学校へのあそびの場スペースづくり」を行うことができました。またニーズはどんどん変わっていくことを、私たちは痛感しています。現在の課題は、保健センターや社会福祉協議会の通常業務が災害支援優先となり、子育て世帯など生活弱者に対する影響が起こりうるかもしれないということです。

私たち「MaMaぽっけ」では、子育てサークル活動への影響を課題とし、サークルさんへの聞き取りや、区社会福祉協議会の担当職員さんが窓口であった支援事業について、私たちメンバーで行うことを検討しています。そのきっかけになったのは、「活動場所が確保できないと、だんだんとメンバーが離れて行ってしまうことが心配。せっかくこれまで、みんなで声をかけ仲間を増やしてきたのに、このままサークルさんが自然消滅してしまうことは絶対にさけたい！」という、一人のサークルの代表さんの声でした。

日常のつながりの大切さ

災害時の子育て支援の活動は特別のことと思われがちですが、実際に経験してみて感じることは、すべてが日常の活動の延長線上にあるということです。日々のニーズが変化し、対応にスピードを求められることも多々あります。日頃の活動では「できる人ができることを、楽しく！」をモットーにしている私たちメンバーにとっては、違う大きなエネルギーを求められます。しかし、日常の活動を通して、これまで一緒に考え、悩み、喜び、楽しみながら共に活動をしてきた人たちとのつながりは、本当に有難く心強いものです。

最後に、私たちは東日本大震災の現場で、支援活動をされた方々の思いや経験を聞かせて頂けたからこそ、今、こうして地域の中で活動することができていると思っています。子ども達のたくさんの笑顔を願うことが、復興への近道と信じて活動を継続していきたいと思います。